

30 愛防第 44 号  
平成 30 年 7 月 27 日

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫防除技術情報（第 4 号）の送付について

このことについて、次のとおりお知らせしますので、御参照の上、防除指導方よろしく  
お願いします。

記

## 平成 30 年 7 月豪雨とその後の異常高温に伴う 農作物における当面の病害虫対策

このことについて、今後の発生や被害が懸念される病害虫の対策について取りまとめま  
したので、ご参照の上、防除指導方よろしくお願いします。

### 1. 水稲、大豆

#### ○水稲

7 月豪雨により浸水・冠水したほ場では、**いもち病**の発生に留意し、定期防除は必ず実  
施した上で、発病が確認された場合には追加防除を行う。また、7 月豪雨後の異常高温によ  
り**紋枯病**の発生が懸念され、既に止葉まで病斑が進展しているほ場では、定期防除に加え  
追加防除が必要となる。**内穎褐変病**及び**籾枯細菌病**は、穂ばらみ期～乳熟期の高温により  
発生が助長され、出穂期（開花期）の降雨はさらに発生を助長するため、定期防除剤に本  
病に効果のある薬剤が含まれていない地域では、スターナ剤、ブラシン剤の追加散布を行  
う。なお、**白葉枯病**については、近年県内での確認事例は無いが、ほ場の浸水・冠水によ  
る発生する病害であるため、今後のほ場観察に留意する（発生を確認した場合には、報告  
願いたい）。

害虫では、**海外飛来性害虫**の誘殺数とほ場内における発生は少なく推移している。但し、  
**トビイロウンカ**は、現在、少発生であっても世代を繰り返しながら急激に増加し‘坪枯れ’  
被害を発生させることがある。このため、定期防除は必ず実施し、ほ場内で部分的な茎葉  
の黄変が見られ始めた場合には、応急防除を実施する。また、**斑点米カメムシ類**は畦畔雑  
草での発生が多くなっており、今後も高温により発生の多い状況が継続するものとみられ  
るため、畦畔除草対策と出穂期の定期防除に加え、追加防除の実施も検討する。

#### ○大豆

**ハスモンヨトウ**は、フェロモントラップでの誘殺数が継続して多い傾向にあり、高温に  
より発生が助長されるので、白変葉（ふ化幼虫の集団加害葉）の発生に注意し、見つけ次  
第丁寧に除去し、早めに防除を実施する。

## 2.果樹

### ○かんきつ

台風7号の風雨による付傷に加え、7月豪雨により樹体へのかいよう病菌の感染が助長されており、罹病性品種を中心に発生が多くなっている（病虫害技術情報第3号参照）。発病葉や発病果実を除去し、銅水和剤を丁寧に散布する。また、夏芽等に発生するミカンハモグリガの被害部から、かいよう病菌が感染するため、本虫の防除も併せて実施し、被害葉は可能な限り切除する。黒点病は春先から適期の防除が実施できているものの、今回の7月豪雨は黒点病防除の目安を超える降水量となったことから、薬剤散布が必要となっている。

害虫では、ミカンサビダニの発生がやや多くなっており、既に果実での発生も確認され、高温は発生を助長するため、地域の指針に記載のある薬剤等を早めに散布する。また、果樹カメムシ類は、ヒノキ球果での寄生数（7月調査）が多いことから、今後の果樹園への飛来につながる可能性があり、園地での発生に注意する。

### ○かき

罹病性品種で炭疽病の発生が多い傾向であり、徒長枝を中心に幼果での発病が目立ち始めている。このため、マンネブ、マンゼブ剤を中心とした防除を徹底する。なお、早生品種では安全使用基準に留意する。

### ○キウイフルーツ

7月の豪雨後の高温により、しおれ症状が目立ち始めている。これらは湿害による根傷みや根腐病等が原因であるとみられることから、溝切などの園地改善や十分な灌水を実施する。

## 3.野菜

浸水・冠水したほ場では次作の栽培前には、土壌伝染性病害対策として土壌消毒を実施する。また、7月豪雨と高温により助長されるウリ科野菜、イチゴ炭疽病の発生に注意する。きゅうりでは草勢が低下するとべと病の発生が多くなるので追肥により草勢の維持管理を徹底する。サトイモでは7月に入り疫病が増加傾向となっており、未発生圃場であってもジーファン水和剤の定期的な散布により、発病を予防する。また、発病株の確認後は、早急に発病茎葉を取り除いてアミスター20フロアブルを散布する（なお、アミスター20フロアブルの使用回数は3回であるため、初秋の発生にも配慮し計画的に使用する。）。

害虫では、高温によりハダニ類やハスモンヨトウの発生が増加傾向にある。いずれも初期防除が重要となる。